

大人たちへのアンチテーゼ

学校のいじめ題材に深く描写

市内出身の鳴海剛（渡邊正剛）Ⅱ写真Ⅱが主演した(有)ゴーイング（渡邊正剛代表取締役）第一弾映画「暴走」が先月30日にアルカディアで上映され、「学校のいじめ」という重いテーマにユーモアを交えながらも、「死のうとするほど苦しんだ生徒のことを思わず、自分のことばかり考える」大人たちへのアンチテーゼ（否定的な主張）を深く描写した作品は、観客の心にさまざまな思いを刻み込んだ。（M）

脚本・監督を務めた東條政利と鳴海が構想を話し合っていた一昨年夏、大きな社会問題になった大津のいじめ問題が発覚。東映と「いじめをなくそう」という映像を作成していた東條と鳴海は学校のいじめを題材にすると決め、暴走は製作された。中学2年生の女子生徒へのいじめは万引きや裸のエスカレートし、生徒は

飛び降り自殺を図った。いじめグループの生徒3人は「いじめはなかった」と主張し、グループの母親の一人（PTA会長）は「犯人扱いだ」「いじめはなかった」と教師を責め、学校側は校長が「ことを荒立てずにいじめはなかった」としようとするなどの対応。そうした時に、いじめグループ3人の氏名と相談した先生から無視され

たことが記された生徒の遺書が学校に届く。相談を無視した教師は誰かと教師は互いに疑心暗鬼となり、相談のメールを誤って他の教師に転送した教師が他の教師のパソコンからメールを削除する隠ぺい工作も



自殺を図った生徒の母親は遺書の存在を知り学校へ駆け付け、いじめグループの母親を責めるが容態急変で病院へ急行。「いじめを知っていた」と告白した担任は「母親の悲痛な思いが分からないのか」とグループの母親を批判。友人は「怖くて話せなかったが、いじめはあった」と証言し、グループの一人は証拠写真を消したことを話し「やらないと自分がいじめられる」と告白した。生徒が助かったと連絡が入ると、グループの母親は「本気で話し合っ

たよかった」、校長は「調査の結果、いじめの実態はなかった」とし、いじめを受けた経験のある担任は「いじめている子は影響力のある子。反感を持たれるのが怖く注意できなかった」などと話した。自分のことばかり考え、死のうとするほど苦しんだ生徒のことを考える大人は誰一人としていない。飛び降り自殺から3か月後、一命を取り留めて学校に復帰していた生徒は、何もなかったかのようにならぬ状況は永遠の繰り返し、もう戻れないと、再び自殺を図ってこの世に別れを告げた。

※DVD好評発売中。問合せは、(有)ゴーイング ☎03-3814-8574へ。

黒

▼市内出身の鳴海剛(渡邊正剛)

と

は、出演・製作

白

した映画「暴走」の見附での上映

前に「この映画にハッピーエンドはない。ハッピーエンドで終わったら、完全にうその話になる」とあいさつ▼「ご覧いただいた方からは極端な賛否両論があり、『もやもやした』との感想が数多く聞かれるが、それでよいと考えている」とも話した▼暴走のテーマとした「学校のいじめ」は大変大きな社会問題。誰一人として大人は自殺を図った生徒のことを考えずに

責任逃れを図り、次々とうそが発覚し互いをのしり合う▼少子化が進み、家庭のみならず地域や社会全体で子どもを育むことが重要とされる中、大人は子どもたちとどう向き合い、どう関わっていくべきか▼暴走は、観客一人一人の心に「もやもやとした」さまざまな思いを深く刻み込む非常に奥行きのある内容だった▼社会問題を取り上げた作品、ふるさと見附を題材にした作品を作ってみたいと鳴海は話しており、次の作品を通して私たちに何を問いかけるかを楽しみにしたい。(M)